Harriet Martineau と Hannah More
――政治・社会状況への危機意識と物語の役割――

松　本　三枝子

序　Harriet Martineau（1802–76）と Hannah More（1745–1833）の関係

英文学史的観点からは、マーティノーは19世紀の作家であり、モアは18世紀に活躍した作家と位置づけられる。マーティノーはユニテリアンの家庭に育ち、同時代の女性としては比較的恵まれた教育を受けていた。兄弟には、オックスフォード大学などで教育を受け、宗教学者となった James Martineau がいる。モアは国教会の家庭に育ち、その環境の中で生涯を終えているが、父親は教育者であり、彼女も姉妹とともに学校を設立するなど教育への関心は高い。特に、William Wilberforce との交友関係から、モアは福音主義派として、下層階級の人々への救済に深い関心をもち活動するようになった。

マーティノーやモアの生きた時代や、家庭環境、宗教的背景などを考慮した時に、これまでは 2 人の相違に焦点が当てられ、十分には比較分析されることがなかったが、本論ではその違いを考慮しながらも共通点を分析したいと考えている。それは彼女たちが各々の時代の政治・社会状況に対して持っていた危機意識と、そのような政治・社会状況を打破するために文学、特に物語の潜在能力と可能性に注目したことである。

モアの生きた時代は、フランス革命の余波が英国にも及び、Thomas Paine の *The Rights of Man*（1791–92）の影響は田舎の下層階級の人々にも流布するような状況であった。モアはそのような革命思想とそれに影響された下層階級の人々の不穏な政治活動や社会状況に危機意識を募らせた。社交界の季節をロンドンで過ごすようになり、彼女は役者の David Garrick、画家の Joshua Reynolds の知己を得て、Elizabeth Montagu、Elizabeth Vesey、Elizabeth Carter たちの

“Blue Stockings” のメンバーとの交流もあった。ロンドン主教であった John Porteus や首相であった William Pitt らに促され、モアは “Anti-Jacobin literature” として *Village Politics*（1792）を執筆し成功を収めている。その後も、*The Cheap Repository Tracts*（1795–97）に収められた多くの物語は、モア自身が書いたものである。反革命文学として、ハナ・モアの書いた物語は、同時代の人々の要請に応え、かつその影響力を保持したものであったといえるだろう。

一方、マーティノーの時代は、まさに第 1 次選挙法改正（1832）の時代であった。世界に先駆けて、産業革命を成功させた英国は、それまでに経験したことのない様々な政治・社会問題に直面していた。階級対立や、貧富の格差に起因する社会問題はその最たるものである。このような深刻な政治・社会問題の解決に、マーティノーが必要と感じていたのが、当時新しい科学として注目されていた “political economy” であった。これは、Adam Smith の *Wealth of Nations*（『国富論』）、Thomas Robert Malthus の *An Essay on the Principle of Population*（『人口論』）、David Ricardo の *Principle of Political Economy and Taxation*（『経済学および課税の原理』）などの古典派経済学を意味する。マーティノーはこれらの知識を国民全体が共有することにより、英国が直面する問題に共通の認識が生まれ、多様な政治・社会問題の解決を導くことができると考えたのである。彼女がそのような意図で書いた *Illustrations of Political Economy*（『経済学例解』）であったが、その出版を引き受けてくれるところはなかなか見つからなかった。彼女は自伝の中で、その時の苦労について、かなり具体的に書いている。

> He [Charles Fox] had seen Mr. James Mill, who had assured him that my method of exemplification, —(the grand principle of the whole scheme) could not possibly succeed; and Mr. Fox now required of me to change my plan entirely, and issue my Political Economy in a didactic form! (Martineau, *Autobiography* 1: 169)

出版社は哲学者でもあり経済学者でもあったジェイムズ・ミルから反対され

て、マーティノーに書き直しを迫っている。経済学の例解（“exemplification”）という方法そのものに反対しており、“a didactic form”を推奨していた。文末の感嘆符に、マーティノーの怒りと慨嘆がよく表現されている。一般の人々への“little books”の成功例として、ハナ・モアの *Cheap Repository Tracts* の成功はジェイムズ・ミルの脳裏にあったであろうが、マーティノーはこれをきっぱりと拒否している。

しかし彼女は、後の書簡の中で、自らの著述による収入は£5,000〜6,000であるが、ハナ・モアの£30,000には遠く及ばないと書いている（qtd. in Peterson 413）。つまり、マーティノーはモアを自らの先達として、また彼女の成功を深く意識していたのである。

本論では、紙数に限りがあることと、議論の焦点を絞るために、マーティノーとモアが書いた物語の中から救貧法に関係するものを分析対象として取り上げ、2人の作家の相違点に考慮しながら、彼女らの共通点について比較分析を進めたい。

Ⅰ　女性作家と“Charity”

最初に、本論で扱う“Charity”についてその内容と定義について確認しておきたい。*Oxford English Dictionary* によれば、“charity=Benevolence to one’s neighbours, especially to the poor, the practical beneficences in which this manifests itself”、「隣人、特に貧しい人々への善意、それが表現された実際の善行」ということになる。この表現は、キリスト教的な意味合いも含み、より幅広く世俗的な行為も含意している。

英国において、貧しい人々の救済を議論するときには、当然公的な救済として救貧法の存在を無視することができない。そもそもこの法律は古くからあり、エリザベス1世の時代にまでさかのぼる。しかしながら本論で扱う18世紀末から19世紀初期の時代における“Charity”については、最近の歴史研究から重要な次のような指摘がある。

In the seventeenth to nineteenth centuries the terms ‘charity’ and

> ‘philanthropy’, like the modern term ‘welfare’, designated broad areas of concern, rather than particular modes of addressing those concerns. The polarity of charity and philanthropy on the one hand and state action on the other was unknown, for the former could include the latter. The English Poor Law, funded by taxation, was sometimes called ‘legal charity’; it was thus distinguished from, but not sharply counterposed to, other forms of charity originated by religious and voluntary bodies. What bound together state and voluntary bodies was that they were both concerned with formulating and implementing policies towards the poor. (Cunningham 2, emphasis added)

カニンガムによれば、17世紀から19世紀における“charity”と“philanthropy”は現代における「福祉」と同様に幅の広い関心を意味するものであった。ここで注目したいのは、税により遂行される救貧法が、宗教的あるいは私的寄付により実行されるその他の“charity”と区別はされるものの、対置されていたわけではないという点である。“a mixed economy of welfare”（Cunningham 2）、「福祉の複合体」（高田 6–11；長谷川 4–18）とも呼ばれる状況で、本論でも救貧法に焦点を絞りながらも、より広くチャリティの行為そのものについて議論をする。

また、公的救済の手段であった救貧法の財源が逼迫していたのが、18世紀末から19世紀初期にあたり、税収をどのように増加するのか、あるいは給付をどのように削減するのかが喫緊の課題となっていた。増加する貧者たちは、フランス革命を考えれば、社会不安と体制転覆への契機となるものであり、無視し放置することはできない状況であった。

それではそのような危機的な状況において、女性作家はどのように対処しようと考えていたのだろうか。18世紀後半における女性とチャリティについて、Patricia Comitini は次のように分析している。

> Today, philanthropy connotes benevolence and altruism, usually taking the form of voluntarily giving money or time. However, in the eighteenth century,

> philanthropy often referred to a feeling of love for mankind and the desire to help improve mankind for the benefit of society as a whole…. [T]his feeling of philanthropy—the love of mankind is a relatively new term by the early eighteenth century. Often, this philanthropic feeling guided charitable action. Improvement was accomplished through the regulation of labor and domestic duties, medical practices, Sunday and Charity schools and 'Friendly Societies.' Towards the end of the eighteenth century, charity takes on a distinctive tone of 'self-help' and the philanthropic work of women's writing becomes disciplining readers into desiring self-improvement. (Comitini 1)

ここで明らかになっているのは、第 1 に“philanthropy”の意味の変遷である。現在では善行や利他主義を主に意味するが、18世紀にはむしろ人類愛という意味合いが強く、社会全体の改善への願望を含意していたことである。第 2 は18世紀末にはチャリティは「自助」という特徴を持つようになったことである。そのため、女性たちは執筆を通して、読者が自己啓発を望むように導こうとした。コミティニは、1790年から1810年に焦点化して議論をしており、この議論はハナ・モアに関して説得力がある。

しかしながら、コミティニの議論は時代的には少し推移するが1830年代のマーティノーにも部分的には適用できる。それは、女性作家は自らの著述が読者の自己啓発を促す働きを持つことを望んで書いたという点である。マーティノーの『経済学例解』は、経済学の知識の共有を通して社会改善を目指すものであり、その根幹には、社会の構成員 1 人 1 人の自己改善が求められている。つまり、ここで強調したいのは、モアもマーティノーも社会改善を個々人の自助努力や自己改善を通して達成しようと意図していた点である。

さらに、モアの *Village Politics* や *Cheap Repository Tracts* の読者層と、マーティノーの『経済学例解』の読者層とが、完全に一致するとはいえないまでも、彼女らの著述が社会の下層に位置づけられた人々、社会的弱者と位置付けられる人々への語りかけであり、物語であったことは共通しているといえる。

以上のように、モアとマーティノーが、社会改善を目指して書いた物語と、

彼女たちが目指した目的に関して、相違点を考慮しながらも共通点を指摘したうえで、彼女たちの物語の比較分析に入っていきたい。

II　政治・社会状況への危機意識と物語の役割

1）ハナ・モア

モアが執筆を開始したのは、18世紀末のフランス革命の影響が英国にも及んだ時代である。国教会、とりわけ“high-church man”であった父親の下で育てられたハナ・モアは生涯その影響下にあったといってよい。そして、そのような体制派の人々にとり、貧困層への革命思想の伝播と流布は脅威であり、体制転覆、つまり革命の危険をはらむものであった。革命思想の代表的なものとして、当時の英国で流布していたのがトマス・ペインの『人権』であった。これらの自由思想とは異なり、英国の保守派の人々は貧富の差や階級の格差については、神の摂理によるものとして受け入れることを求めていた。例えば、モアの著作選集の編者である Robert Hole は次のように書いている。

> The religious beliefs of high-church Anglicans not only provided them with a Biblical foundation for political obligation, it also sanctified the existing social hierarchy as the work of Devine Providence. (Hole xx)

このような現状維持の思想はハナ・モアも共有しており、それが時に現代の我々にとり、彼女の著作が退屈に感じられる原因ともなっているのは事実である。しかしながら、当時の英国は前述したように革命思想の波が大陸から押し寄せ、保守派にとり危機的な状況であった。G. H. Spinney は“Cheap Repository Tracts: Hazard and Marshall Edition”において次のようにその状況を書いている。

> England in the last decade of the eighteenth century began to be flooded with revolutionary pamphlets. The revolution in France had been fostered by the printing press, and it was featured that Tom Paine and his followers might undermine the morals of the poorer classes in England in the same manner, unless

some reply in kind was made. (Spinney 296)

ここで注目すべきは、革命思想が政治冊子により流布されていたこと、そしてそれが英国の貧困層の道徳を蝕むものと位置付けられ、それに対抗するものが必要と考えられていたとの指摘である。革命思想に対抗するものとして、モアは物語を書いたのであるが、それは政治的な意図というよりは道徳的な意図によるものと考えられ、それが前述したホールの引用でも明らかなように、国教会信徒に求められた宗教的義務であり同時に政治的義務であったのである。

Linda H. Peterson は、モアが物語を書くに至った状況について次のように分析している。

> In the early 1790s, fearful of the growth of revolutionary political movements and of the racy, Jacobin literature that circulated among the rural poor, More and her sisters drew up a plan for producing and distributing "safe and salutary reading" to charity children, Sunday schools, and the rural poor, and sent the prospectus to their Evangelical friends in order to secure subscribers. (Peterson 409, emphasis added)

モアは、「健全で有益な読み物」を養育院や慈善学校、日曜学校などで提供しようとしたのである。産業革命後の社会の中で生活していくうえで、読み書き能力は下層の人々にも必要なものとなっていった。しかし問題となるのは何を読むかということになり、彼らに必要な読み物としてモアは「健全で有益な読み物」、物語を書いたのである。

前述したスピニーはモアが *Cheap Repository Tracts* で採用した出版形態について極めて興味深い指摘をしている。

> To this end a number of 'moral tales' and ballads—over fifty of them from the lively pen of Hannah More—were decked out with rakish titles and woodcuts in the guise of the genuine chapman's pennyworth, and sent out, like sheep in

> wolves' clothing, to be sold by hawkers in competition with their 'old trash'. (Spinney 295)

下層の人々に受け入れられるように、ある種の偽装を施してモアは物語を出版している。彼女がそこまで思い切った手段を採用したのは、前述した下層階級への革命思想の流布があるが、同時に当時の上流階級の人々による貧困層への責任の欠如が考えられる。ジェントリー階層、地主階層の人々がそれまで負担していた農村労働者への責任を放棄してしまい、下層の人々は貧困の中であえいでいた。そのようなパターナリズムの崩壊について、モアが危機感を持っていたことについて、Mitzi Myers は次のように指摘している。

> Blood abroad and anxieties at home—working-class illiteracy, improvidence, drunkenness, and poverty; luxury, immorality, and abdication of communal responsibility among the upper ranks…. More shows herself keenly alert to these strains and fissures in the social fabric; they form the backdrop and the stuff of her stories, which are often, as with those concerning the great grain scarcity of 1795–96, intensely topical. (Myers 269)

モアは下層階級の道徳改善には中・上流階級の指導や模範が不可欠と考えていたために、それらの人々の意識改革も喫緊の課題と捉えていたことがわかる。この点については、ハリエット・マーティノーとの比較分析を踏まえて後述したい。

2）ハリエット・マーティノー

マーティノーが『経済学例解』を書いたのは、まさに第 1 次選挙法改正の時代であった。ユニテリアンの家庭に育った彼女の意識は、モアの保守主義的な考え方とは異なるものであった。しかし、革命を支持するような立場ではない、むしろ社会改革による社会の安定と繁栄の必要性を痛感していた。リンダ･H･ピーターソンは次のようにマーティノーの自由主義的思想を分析してい

る。

> … she [Martineau] conceived of the era of the First Reform Act as the English equivalent of the French Revolution…. In other words, in conceptualizing the years 1830–1832, the period in which she planned the *Illustrations of Political Economy* and published its first installments, Martineau envisioned an English revolution—not one of regicide and lawless violence…, but a war of ideas in which thinking men and women of all classes would usher in a new political era. (Peterson 440–41, emphasis added)

あらゆる階級の思考する男女が新しい政治の時代を導入する理念の闘いの時代として、マーティノーが同時代を捉えていたという指摘は同意できるものだ。マーティノー自身が、出版社が見つからず苦労する中で『経済学例解』の必要性について次のように自伝で言及している。

> I began now, at last, to doubt whether my work would ever see the light. I thought of the multitudes who needed it, —and especially of the poor, —to assist them in managing their own welfare. I thought too of my own conscious power of doing this very thing. Here was the thing wanting to be done, and I wanting to do it…. (Martineau, *Autobiograpy* 1: 171)

重要なのは、彼女がこのシリーズを下層の人々のために書こうと決意していることである。それは彼女の一貫した考えで、このシリーズの出版に際しての序文でも明らかにしている。つまり、新しい科学として、高等教育機関などではすでに普及していた経済学という学問を、充分な教育を受けていない人々、特に女性や労働者を対象として解説しようとしたのが、『経済学例解』である。

> There are a few, a very few, which teach the science systematically as far as it is yet understood. These too are very valuable: but they do not give us what we

want—the science in a familiar, practical form. They give us its history; they give us its philosophy; but we want its *picture*. (Martineau, *Illustrations* 1: xi)

ここで強調されている“picture”こそが、マーティノーの考えた“Illustration”、「例解」という方法である。具体的には、物語による経済学の解説である。前述したように、ジェイムズ・ミルに反対され、出版社からは教訓主義的方法を提案されたがきっぱりとこれを拒否している。マーティノーはモアと異なり道徳を教えようとしたのではないし、現状の維持を意図しているわけでもない。むしろ彼女の意図は社会変革であった。そのためには、社会全体の合意形成が必要になり、その情報共有と解決策の理解に経済学の知識が必要と考えていたのである。

つまり、物語という方法は同時代の社会を危機的状況と認識したモアと同様にマーティノーが採用した方法である。彼女たちのベクトルの向きは異なっているが、ふたりはともにフランスで起きたような革命を回避するために書いていることも事実であり、そのためには大衆、つまり多くの国民の教育が不可欠と考えて物語を書いているのである。

Ⅲ　救貧法の濫用から救貧法廃止の議論へ

それではここからは具体的にモアとマーティノーの物語の分析に入っていきたい。ふたりはともに多くの物語を書いているので、対象とする作品を貧困、特に救貧法を扱っている作品に絞ることにする。

１）モアと救貧法

取り上げるのは、モアが1792年に出版した *Village Politics* と *Cheap Repository Tracts* に収められている“The Lancashire Collier Girl”である。

『村の政治学』はトマス・ペインの『人権』（1791–92）を愛読する石工トムと愛国主義者の鍛冶屋ジャックの政治談議である。

Tom. … I say all men are equal. Why should one be above another?

> *Jack*. If that's thy talk, Tom, thou dost quarrel with Providence, and not with Government. For the woman is below her husband, and the children are below their mother, and the servant is below his master.
> *Tom*. But the subject is not below the king: all kings are "crowned ruffians;" and all governments are wicked. For my part, I'm resolved I'll pay no more taxes to any of them. (More, *Village Politics* 227)

トムが革命思想に影響されて人間の平等を求めているが、ジャックはそれは政治の問題ではなく、宗教、道徳の問題であるとしている。なぜなら社会階層は神の摂理によるものであるからだ。これは前述したように国教会信徒の中では当然のように受け入れられていた考え方である。ある意味で、社会における格差、貧困の問題は、神の摂理によるものとしてあるがままに人間は受け入れるべきということである。自由と平等を求め続け、納税を拒否すると息巻くトムの議論に変化が生じるのは、ジャックが救貧法について述べたときからである。

> *Jack*. 'Twas but last year you broke your leg, and was nine weeks in the Bristol infirmary, where you was taken as much care of as a lord, and your family was maintained all the while by the parish. No poor-rates in France, Tom; and here there's a matter of two million and a half paid for the poor every year, if 'twas but a little better managed. (More, *Village Politics* 231, emphasis added)

トムが骨折した時に 9 週間も入院でき、その間家族を教区が世話をしてくれたことにジャックは言及している。それらはすべて救貧法によるものであり、そのような法律がフランスにはないとジャックは指摘する。つまりトムが納税を拒否すれば、自らの困窮時に救済の手段となった救貧法が実行されなくなってしまう。結局、トムはジャックに説得されて、フランスよりも、英国の現状の方が良いと納得し、最後はふたりで愛国歌 "O the Roast Beef of Old England" を歌う。トムのジャックへの次のような警告は読者への警告でもある。"Study

to be quiet, work with your own hands, and mind your own business”（More, *Village Politics* 236）。これは極めて保守的で体制維持の思想を反映している。

しかし、同時に上記の引用で看過できないのは下線部分である。英国では貧民のために250万ポンドが費やされていること、さらにそれが必ずしもうまく運用されていないことに言及している点である。英国礼賛のジャックをしてもなお、救貧法の経費の肥大化と、その運用の問題を指摘せずにはいられない状況であったことをこの引用は明らかにしている。

次に見たいのは同じモアが書いた『ランカシャーの炭鉱娘』である。これは炭鉱夫の一家がその大黒柱である父親を事故で亡くした後に、その娘のメアリが中心になり一家を支えて生活していくさまが描かれている。夫を突然の事故で亡くしたメアリの母親は正気を失い精神病院へ入り、遺された子供たちは炭鉱で働き一家を支えていくことになる。その時にやはり彼らの世話をするのが教区である。

> In this place I cannot avoid observing what a blessing it is to poor people in this country, that parish officers are obliged, in all such cases of necessity as that of which I am now speaking, to give maintenance to those who apply to them; and <u>what a pity it is that this wise and merciful provision of our laws should ever be abused!</u> (More, *The Lancashire Collier Girl* 11, emphasis added)

父親が事故死し、母親が精神病院に収容されるような場合、教区ではその一家の面倒をみるのは当然のこととなっている。救貧法の実施は教区を通してなされるので、この物語の一家においても救済は救貧法によるものなのである。語り手はこの法がいかに慈愛あふれるものか称賛しているが、同時にこの法が濫用されていることに慨嘆している。

モアの物語はフランスに対して英国の優位を語る意図を持っているが、同時に英国の現状を語るものとなっている。そこで、救貧法は両国を比較するうえで最適のテーマであり、英国の優位を語る結果となる。なぜならそれはまさに貧民の救済のための法律であるからだ。

しかし同時に、必ずモアの物語が言及しているのが、救貧法が抱えていた問題である。それは経費の肥大化と濫用の問題である。つまり、これらの問題は18世紀末の英国において、保守派内でも大きな問題として指摘されていた事実を、モアの物語は暴露していることになる。

2）マーティノーと救貧法の廃止

福音派ではあるものの国教会信徒であったモアとは異なり、ユニテリアンのマーティノーは現状の改革に対して積極的であった。本論で焦点を絞っている救貧法に関しても、マーティノーの立場は極めて明確である。彼女はそれを経済学の理論に基づいて物語により解説している。それが『経済学例解』のシリーズに収められた *Cousin Marshall* であり、シリーズの直後に出版された *Poor Laws and Paupers Illustrated* である。

マーティノーが『経済学例解』を書くにあたり影響を受けたと認めているのが、Jane Marcet の *Conversations on Political Economy in Which the Elements of That Science Are Familiarly Explained*（1817）である。マーセットのこの書は経済学の入門書として成功を収めたものであり、女教師と女生徒の対話により経済学が解説されている。そこでは救貧法の制度そのものが悪法であると指摘している。その理由は主にふたつある。第 1 に労働の価値の低下であり、次のように述べられている。

> Mrs. B: The greatest evil that results from this provision for the poor is, that it lowers the price of labour; the sum which the capitalist is obliged to pay as poor rates necessarily reduces the wages of his labourers, for if the tax did not exist, his capital being so much more considerable, the demand for labour, and consequently its remuneration, would be greater. (Marcet 164, emphasis added)

ここで女教師のＢ夫人は救貧税により資本家の資産が減少してしまい、結局はそれが労働者に支払われるべき報酬を減少させることになり、長期的には労働力の需要さえも減じることになると指摘している。この点は救貧税の資本への

悪影響とその結果としての労働者への報酬の減額と労働価値の低下である。

第2は救貧税が下層への転落、貧困への転落の契機となることである。B夫人は次のように指摘している。

> Mrs. B: … we may hope that the influence of prudential habits will gradually raise the poor above the degrading resource of parochial assistance; and enable us in the course of time to abolish the poor rates; a tax which falls so heavily on the middling classes of people, and which is said to give rise to still more poverty than it relieves. (Marcet 163, emphasis added)

そもそもここでは救貧税による救済を不面目なものと位置付けており、その廃止の必要を明言している。それはその法が貧困の救済を謳いながら、むしろその逆に貧困を生み出しているという指摘である。

上記の2点はマーティノーの *Poor Laws and Paupers Illustrated* に収められた“The Parish”と題された物語でも共有している考え方であるので、それを指摘しておきたい。まずはこの物語に登場する労働者Goodmanの救貧税に対する次のような不満である。

> It was true that Goodman was so far better off than others that he was sure of work as long as his master had any to be done; but he felt himself injured by the system under which he worked, as much as if he had been obliged to pay to his pauper neighbours a fourth, or even a third, of the wages of his hard labour. (Martineau, *Poor Laws and Paupers Illustrated* 14)

グッドマンは共済組合などにも加入しており、不測の事態にも備えようとするある意味で理想的な労働者である。しかし、彼の救貧税への不満は、教区の貧民のために自らの重労働で得た収入の4分の1、時には3分の1も拠出しなければならないことである。実質的に彼の労働の価値は4分の3にあるいは3分の2に低下していることになる。この物語冒頭では、理想的労働者として家族

を十分に養っていた彼であるが、物語後半では職を失い経済的に破綻し、家族ともども救貧院に入ることを余儀なくされている。彼は救貧税を支払う側から、受給する側へ転落してしまった例である。つまり下層への転落、貧困への転落が生じている。

次に、この物語で注目すべき登場人物は、救貧法施行委員の Goldby である。彼は給付を差配する側である。彼はこれまでに貧民を援助するために、屋敷の使用人としてあるいは農場の労働者として雇用してきた。救貧税だけでは、教区の貧民に十分に対応できない現状を認識していた彼は、自らの資産を拠出して彼らを救済しようとしてきた。しかし、その結果が、彼の農場の焼き討ちであった。物語は次のように、その経緯を描いている。

> He [Goldby] had paid away all his savings for years to support persons who were no more contemplated by the Poor laws at the time of their formations than the House of Lords; and his reward had been to have his property destroyed by fire, because his neighbours had been encouraged to think him not generous enough. (Martineau, *Poor Laws and Paupers Illustrated* 51)

この事件は、1830年代当時に“Swing Riot”と称されていた、納屋の焼き討ちや脱穀機の破壊などの農村部での暴動を彷彿とさせる。給付の減額や、給付申請の採否に権限を及ぼすとされた Goldby への不満が、労働者や貧民たちの暴動の標的とされたことになる。資産を喪失し経済的に破綻した彼は、教区から家族とともに姿を消すことになる。貧民の無理解に起因するが、これもまた救貧法が及ぼす悪影響の部分である。

さらに、『経済学例解』シリーズに収められた『カズン・マーシャル』では、貧者であるマーシャル夫人と、彼女らを見守る医者である Mr. Burke の双方から救貧法の問題点が語られている。清貧ではあるが自立して生活を営んでいるマーシャル夫人は隣人の Mrs. Bell が夫と別居することで、未亡人として給付を得たり、亡くなった子供の毛布などの支給を申請して認められていることに気が付いている。このような救貧法への虚偽申請やその濫用が教区の貧民の側

には明らかなのである。マーシャル夫人は次のように救貧法について認識している。

> Mischiefs out of number came of it, and no good that she [Mrs. Marshall] saw. The more relief the law gave, the more it might give, to judge by swarms of paupers; and all this made it the more difficult for honest and independent folks to get their bread. She thought her own experience, and Mrs. Bell's together, might be enough to show how bad the system was. (Martineau, *Cousin Marshall* 103, emphasis added)

このマーシャル夫人の意見には、前述したマーセットが挙げている救貧法のふたつの問題点が含まれている。なぜなら、救貧法により正直で自立した人々が生計を立てることをより困難にし、さらにこの法により貧民が減少するどころか増加することになっていると指摘しているからだ。マーシャル夫人は労働者グッドマンとは異なり、救貧院に最後まで入ることは選択しないが、まさに赤貧の中で最期を迎えることになる。彼女の選択した厳しい自立した生活と寂しい最期は、救貧法の犠牲者として象徴的に描かれているのである。

医者のバーク氏は救貧法の実態を知る立場から次のように述べている。

> "… the funds raised for the relief of pauperism in this country exceed threefold the total revenues of Sweden and Denmark. Ay; our charitable fund exceeds the whole revenue of Spain; and yet distress is more prevalent than ever, and goes on to increase every year. The failure of British benevolence, vast as it is in amount, has hitherto been complete; and all for want of right direction." (Martineau, *Cousin Marshall* 39)

彼はもちろんマーシャル夫人同様に救貧法の濫用にも気が付いているが、彼の視点はマクロ的である。英国における貧民救済の費用が、他国の歳費を超えるものとなっていると指摘し、この方法が、救貧法も含めて失敗していると明言

しているのである。彼はさらに、英国国民であれば誰もが国により救済される権利があるとする受給権についても、国と国民を親と子の関係で見る誤った比喩に基づく考え方として退けている（Martineau, *Cousin Marshall* 45）。そしてクリスマスのチャリティに関しても友人に廃止するように勧めている。

> "If I were you, and if I were the government, I would immediately disavow the principle in question, and take measures for ceasing to act upon it. If I were you, I would explain to my neighbours that, finding this mode of charity create more misery than it relieves, I should discontinue it in the way which appears to inflict the least hardship. I would notice that, after the next Christmas donation, no more coals and blankets shall be given except to those aged and sickly people who at present look for them…." (Martineau, *Cousin Marshall* 117–18, emphasis added)

物品や金銭を与えるチャリティそのものについて、バーク氏は否定している。そしてこの考え方は、マーティノーが支持している考え方でもある。彼女の書く物語において、医者は新しい社会の指導的役割を期待される専門職業人であるが、『カズン・マーシャル』においてもバーク氏はマーティノーの救貧法に対する考え方を代弁する人物となっている。

『経済学例解』の各話の巻末にはその巻のまとめが作者により書かれている。『カズン・マーシャル』では次のようにまとめられている。

> The subsistence-fund must be employed productively, and capital and labour be allowed to take their natural course; i.e. the pauper system must, by some means or other, be extinguished.
>
> The number of consumers must be proportioned to the subsistence-fund. To this end, all encouragements to the increase of population should be withdrawn, and every sanction given to the preventive check; *i.e.* charity must be directed to the enlightenment of the mind, instead of to the relief of bodily wants. (Martineau, *Cousin Marshall* 131–32, emphasis added)

これは肉体の欲求を満たすよりも、精神の啓蒙、つまりは教育の必要を重視する考え方であり、救済の費用を生産的に用いようとする提案でもある。それではマーティノーはどのような教育が必要と考えていたのだろうか。

Ⅳ　教育の重視と知識の共有

前述したようにマーシャル夫人の最期は極めて厳しい彼女の生活からも寂莫とした状況で描かれている。薪を運ぶときに戸口で躓き、それが原因で寝込むことになりひとり寂しく亡くなる。遺品は聖書と自らの葬儀代である。ここに最後まで赤貧ながらも自立を誇りに生きてきたマーシャル夫人の矜持が表現されている。しかしながら、村人たちは彼女の最期を白眼視しており、彼女の縁者は口惜しい気持ちを抑えられない。そのようなマーシャル夫人の最期に関して、バーク氏は次のような解釈を提示している。

> “… we may as reasonably say that your cousin lived too early as that she lived too late. The time will come, trust me, when there will be end of the system under which she has suffered. It cannot always be that the law will snatch the bread from the industrious to give it to the idle, and turn labour from its natural channel, and defraud it of its due reward, and authorise the selfish and dissolute to mock at those who prize independence, and who bind themselves to self-denial that they may practise charity. The time will come, depend upon it, when the nation will effectually take to heart such injustice as this.” (Martineau, *Cousin Marshall* 129)

ここでバーク氏は明らかにマーシャル夫人の生き方を支持している。隣人たちは彼女の生き方を理解していなかったが、それは時代がまだ彼女に追いついていないからだ。勤勉な者が怠惰な者の犠牲になり、労働が正当な報酬を得ることができない状況が批判されている。しかしながら、そのような現在の状況が正される時代が到来することへの言及もある。

つまり、マーティノーはバーク氏を介して、救貧法の廃止を予言していることになる。ヴィクトリア朝の統計学者である William Farr の “knowledge [would]

banish panic” に言及して、Elaine Freedgood はマーティノーが『経済学例解』で意図したのは、厳しい現状のすぐ先には繁栄と調和の時代が到来する兆しがあることを示すことであったとしている。

> In the first three decades of the nineteenth century, a number of British liberal intellectuals wrote treatises, tracts and stories to popularize the “laws” of classical political economy. Their hope, as the Victorian statistician William Farr put it, was that “knowledge [would] banish panic”…. Harriet Martineau’s *Illustrations of Political Economy* … was among the most successful of such works…. A narrative method that invests heavily in plot and economizes severely on character and detail allows the stories to pick their way through the minefield of Britain’s new economy, systematically and speedily revealing the signs of increasing stability and prosperity which lie just beneath its very troubled surface. (Freedgood 33, emphasis added)

この解釈は本論で扱っている『カズン・マーシャル』でも有効である。マーティノーにとり理想的な生き方を選択したマーシャル夫人が物語の中では評価されず、周囲からは白眼視され寂しい最期を迎えている。このような物語の結末が選択されたのは、誤っている現状を批判するためである。貧しい中でも自立する生き方を選択することが本来であれば正しい生き方であるにもかかわらず、救貧法の濫用や虚偽申請により、人々は給付に依存する生き方を選択している。その結果、労働をせずに給付を得る生き方をする人々が増加し、財政的な破綻に瀕しているのが当時の英国の現状であった。

バーク氏の言葉が単なる楽観的な予言に終わらないためには、フリードグッドも指摘しているように、知識の大衆化が不可欠であった。バーク氏の言葉は、経済学に基づく分析であるゆえに有益なのであり、それを受け入れ理解するためには、その知識を共有する必要がある。マーティノーは産業革命後の英国が直面していた多くの社会問題の解決には、経済学という専門的知識の共有が不可欠であると考えていた。それが、『経済学例解』を出版するときの困難

にもかかわらず、彼女がこのシリーズの需要を確信していた理由である。

現在のマーティノー研究の牽引者のひとりである Deborah A. Logan は文明化の使命に関するマーティノーの考え方を次のように分析している。

> … there is one key idea to which she [Martineau] remains constant, and that is her belief in the efficacy of science to resolve social problems. Science, she argues, transcends the racial and nationalistic "chasms" separating west and east, promising a *lingua franca* relevant to the modern era: "there is nothing in the whole range of human ideas which can operate in the same way on the European and native mind but fact, or, in its extended sense, science". (Logan, *Harriet Martineau* 13)

ここでローガンはマーティノーのインド統治論について分析しているのだが、この分析は、マーティノーの初期の著作である『経済学例解』にも適切な指摘である。マーティノーは、貧困、階級、人種に起因する様々な亀裂に橋を架けるものとして、科学への信頼を生涯持ち続けた。それは当時新しい科学と称された経済学への信頼であり、そのような専門的な知識を、一部の選ばれた人々ではなく、労働者や女性など当時は十分な教育を受けていなかった人々と共有するために、彼らが理解しやすい方法である物語による手引書として普及させようとしたのである。

以上のように、救貧法に関係するモアとマーティノーの著作を中心に分析した結果明らかになるのは、彼女らが同時代の政治・社会状況に対して抱いた危機意識と、そのような状況を打破するために彼女らが選択した物語という共通の方法である。モアは社会の安定のために、マーティノーは社会の変革のためにと、各々の目的は異なるが、十分な教育を受けていない労働者や女性と、情報や知識を共有することが喫緊の課題として認識されていたことが分かる。さらに、そのために有効な手段として、モアとマーティノーは、だれもが容易に読むことができ、親しみやすく分かりやすい物語という方法を選択したのである。

＊本論は日本英文学会第88回大会シンポジウム「近代イギリスのチャリティを読む」における研究発表「Harriet Martineau の *Illustrations of Political Economy* と Poor Law ――先達として Jane Marcet、Hannah More」に加筆修正をしたものである。
＊本研究は JSPS 科研費16K02456「手引書としてのマーティノー『経済学例解』研究――物語による専門的知識の普及」による研究成果である。

Bibliography

Primary Sources

Marcet, Jane Haldimand. *Conversations on Political Economy in Which the Elements of That Science Are Familiarly Explained*. London, 1816. Cambridge: Cambridge UP, 2010.

Martineau, Harriet. *Illustrations of Political Economy*. 9 vols. London: Charles Fox, 1834.

———. Preface. 1832. *Illustrations of Political Economy*. 1: iii–xiii.

———. *Cousin Marshall*. 1832. *Illustrations of Political Economy*. 3: 1–132.

———. *Poor Laws and Paupers Illustrated: The Parish*. 1833. Memphis: General Books, 2012.

———. *Harriet Martineau's Autobiography*. 1877. Ed. Gaby Weiner. 2 vols. London: Virago, 1983.

More, Hannah. *The Works of Hannah More*. 7 vols. London: Fisher and Jackson, 1837.

———. *Village Politics*. 1792. *The Works of Hannah More*. 2: 221–36.

———. *The Lancashire Collier Girl*. 1795. *The Cheap Repository Tracts*. London, 1842.

———. *Selected Writings of Hannah More*. Ed. Robert Hole. London: Pickering, 1996.

Secondary Sources

Comitini, Patricia. *Vocational Philanthropy and British Women's Writing, 1790–1810: Wollstonecraft, More, Edgeworth, Wordsworth*. Farnham: Ashgate, 2005.

Cunningham, Hugh and Joanna Innes, eds. *Charity, Philanthropy and Reform from the 1690s to 1850*. London: Palgrave, 1998.

Ditchfield, G. M. "English Rational Dissent and Philanthropy, c.1760–c.1810." Cunningham 193–207.

Dzelzainis, Ella. "Reason vs Revelation: Feminism, Malthus, and the New Poor Law in Narratives by Harriet Martineau and Charlotte Elizabeth Tonna." *Interdisciplinary Studies in the Long Nineteenth Century*. 2 (2006): 1–15.

Elliott, Dorice William. *The Angel out of the House: Philanthropy and Gender in Nineteenth-Century England*. Charlottesville: UP of Virginia, 2002.

Freedgood, Elaine. "Banishing Panic: Harriet Martineau and the Popularization of Political

Economy.” *Victorian Studies*. Autumn 1995: 33−55.

Gallagher, Catherine. *The Industrial Reformation of English Fiction: Social Discourse and Narrative Form 1832–1867*. Chicago: U of Chicago P., 1985.

Hobart, Ann. “Harriet Martineau’s Political Economy of Everyday Life.” *Victorian Studies*, Winter 1994: 223−51.

Hole, Robert. Introduction. *Selected Writings of Hannah More*. vii−xxxviii.

Kelley, Gary. *English Fiction of the Romantic Period 1789–1830*. London: Longman, 1989.

Logan, Deborah A. *Harriet Martineau, Victorian Imperialism, and the Civilizing Mission*. Farnham: Ashgate, 2010.

[Maginn, William.] “On National Economy: Review of Miss Martineau’s ‘Cousin Marshall.’” *Fraser’s Magazine* (Nov. 1832): 403−13.

Myers, Mitzi. “Hannah More’s Tracts for the Times.” *Fetter’d or Free? British Women Novelists, 1670–1815*. Eds. Mary Ann Schofield and Cecilia Macheski. Athens: Ohio UP, 1986: 264−84.

Nardin, Jane. “Hannah More and the Problem of the Poverty.” *Texas Studies in Literature and Language*. 43 (2001): 267−84.

Peterson, Linda H. “From French Revolution to English Reform: Hannah More, Harriet Martineau, and the “Little Book.” *Nineteenth-Century Literatures*, 60 (2006): 409−50.

Polkinghorn, Bette. “Jane Marcet and Harriet Martineau: motive, market experience and reception of their works popularizing classical political economy.” *Women of Value: Feminist Essays on the History of Women in Economics*. Ed. Mary Ann Dimand, et.al. Aldershot & Brookfield: Edward Elgar, 1995: 71−81.

Review of “Cousin Marshall.” *The Spectator* (8 Sept. 1832): 853−55.

Spinney, G. H. “Cheap Repository Tracts: Hazard and Marshall Edition.” *Library 3* (Dec. 1939): 295−340.

浜林正夫『パブと労働組合』新日本出版社、2002.

長谷川貴彦『イギリス福祉国家の歴史的源流――近世・近代転換期の中間団体』東京大学出版会、2014.

金澤周作『チャリティとイギリス近代』京都大学学術出版会、2008.

松本三枝子『闘うヴィクトリア朝女性作家たち――エリオット、マーティノー、オリファント』彩流社、2012.

坂下史「近世イギリスの社会公益事業――救貧・慈善をめぐる議論と救済の現場」陶徳民他編『東アジアにおける公益思想の変容』日本経済評論社、2009.

高田実・中野智世編『近代ヨーロッパの探求15　福祉』ミネルヴァ書房、2012.